

令和5年2月17日

津久井やまゆり園 Aさんについて

1 はじめに

自閉症があるAさん（男性30代）。令和3年9月29日に他施設から入所され、津久井やまゆり園で生活をしている。生活をする中で突発的に物品を破壊する行為や他者に対して叩く、蹴る、噛みつくなどの行動があったため、その様な時の危機介入としてセラピューティックホールド（身体拘束）を実施していた。

津久井やまゆり園に入所されて1年半ほどが経過した現在では、危機介入としてもセラピューティックホールド等による身体拘束は実施していない。入所をされてから現在に至るまでのAさんの生活状況や変化、支援内容及び支援者の対応について。また、今後の支援について報告をする。

2 入所後の様子

津久井やまゆり園再建に伴い、Aさんが津久井やまゆり園に引越しをされることが決まってからは、入所されていた前施設と綿密に打ち合わせを行った。また、詳細な引き継ぎについては担当者間で行っている。出来るだけ引越し前と同じような環境になるよう準備を進め、また、日課などは異なることから、1日のスケジュールを視覚的に提示しつつ、Aさんの様子を確認して支援を組み立てていった。だが、引越し当日より環境の変化や日課の変更の受け入れが困難だったと思われる大きなパニックがあり、物品の破壊や支援者への叩きや噛みつき、唾吐き等の他傷行為があり、その様な場面が週に1、2回と頻度も高かった。そのような際には情緒の安定を図るため医療と連携して頓服薬の使用や、破壊行為によるAさんの怪我の防止を目的として切迫性・一時性・非代替性の三要件に基づいて、危機介入によるセラピューティックホールドを月2回程実施していた。

3 入所後の経過

生活場面では、Aさんが発する単語に着目し、どのような意図をもって話されているのかを発語対応表として作成した。また、支援者の対応によってAさんが混乱しないように支援マニュアルを作成し、統一化を図った。

昼間の日中活動場面ではワークシステムの導入を行い、絵カードを用いて視覚的に伝えることで、スムーズに活動に取り組む場面が徐々に増えていった。ユニット内でも余暇支援のためのワークシステムの導入などを試行したが、提示方法がAさんに合っていなかったためか定着しなかった。また、余暇課題等が混乱時に破壊する物品となってしまったため、提供については中止している。

4 Aさんへの支援の現状

Aさんの現在の生活では、破壊や他者に対して叩く・蹴る、噛みつく等の強い他傷行為はなくなっているが、入所後半年の様子と比べると激減している。理由としては、Aさん自身が現在の生活環境に慣れた部分も大きな要因ではあるが、昼間の日中活動場面が安定している事、支援者の対応が統一化し混乱する要因が少ない事、Aさんの要望や要求が発語対応表等により周囲へ伝わりやすく、主に日課等について応えられるような環境を設定している点が大きいと思われる。そのため、危機介入によるセラピューティックホールドによる身体拘束については、令和4年3月に行われたのを最後に生活することが出来ている。

5 今後の支援について

セラピューティックホールドによる身体拘束の実施は行わずに過ごしているが、生活の中で課題点が無いわけではなく、突発的な破壊等については時折だが見られている。理由や原因が解らない事も多いが、生活場面のみで行っていることから、場面選択的に起こっている。そのため、外部のコンサルテーションを受けながら、生活場面でもアクティビティシステムを導入するなど生活全体の見直しを行っている。

Aさんがより安心して色々な経験をしつつ、少しでもAさんが望む生活が送れるように、支援を継続していければと思う。